

オレンジハウスのアプローチについて



背景情報

ドメスティックバイオレンス(DV)

オランダでは、18歳から70歳の人口の内、何らかの形でDVを経験している人は、およそ45%です。一年に約20万人がDVの被害者になります。DVは病死以外の最も多い死因です。全国で一年にシェルターに保護される人数は、約16,500人です。



私たちの支援と利用者

オレンジハウスを運営するブライフグループ財団は、広範囲の関係者とつながり、取り組むことでDVを止めることができると確信しています。暴力をできるだけ自宅に残ったまま止めるためには、当事者の強みと人脈を活かすことに焦点を当てます。そして、そうするのが残念ながら(当面)不可能である危機状況の場合にも支援します。

ブライフグループ財団は北ホラント州とフレヴォラント州でDV被害者に様々な支援を提供しています。オランダの首都アムステルダムが含まれる地域です。300人位の職員と50人以上のボランティアで1つの「家庭安全センター」と5つのシェルターを運営しています。プロジェクト以外の年間予算は約2,200万ユーロ(※約28億7,206万円)です。支援の対象は、オランダの全人口1,700万人の内、約250万人が住む地域です。同類の組織の中でも、最大級です。保護できるのは、一時保護42組、緊急用ベッド6床、秘匿シェルター1か所(致死的な危機が迫っている人のための一時保護)、中期的支援施設132組(7組は男性用)です。

利用者の背景は幅広く、65か国の方がシェルターを利用しています。設備と利用者数については、付録1をご参照ください。

私たちの組織

現在のブライフグループ財団は、8つの独立した団体が8年かけて(2000年～2008年)8段階を経て、統合した組織です。大きな規模は、各支援サービスと施設を特色づけて、全ての支援活動と職員を支える本部事務局の設立を可能にしました。

ブライフグループ財団は専務理事がいます。2016年からは、自主的なチームが協働していますので、専門職の自律性が高まります。



オレンジハウスのアプローチ

オレンジハウスのアプローチとは？

ブライフグループ財団が長年かけて開発した画期的なオレンジハウスのアプローチ(1)は、シェルターがDV被害者とその家族と関わる方法をすっかり変えました。DVシェルターのあり方と支援の仕方も変わりました。オレンジハウスの建物では、必要な保護と支援を安全で、なおかつ開かれて可視化された場所で提供しています。昔の閉鎖的な支援では、多くの関係者は解決に関わっていなかったため、それとは違う介入方法を実践しています。システムアプローチと言って、家族を取り巻く環境の社会的文脈に焦点を当てます。家族のすべての構成員(安全にできれば、パートナー・元パートナー(加害者)も含めて)と一緒に家族のための包括的な計画を立てます。一番の目的は孤立からの解放です。秘匿シェルターに保護されると、社会的孤立がさらに深まります。居場所を人に知らせることも、訪問者を迎え入れることもできません。見えやすく、誰もが認識できるシェルターは、女性そして特に子どもの孤立を打ち破ろうとしています。元の地域社会から離れない方が、その地域で生活再建しやすくなります。

シェルターを一新させる必要性を感じたきっかけは？

秘匿シェルターから、家族全員と関わるオープンシェルターへの移行は、歴史的経緯と経験に基づき、研究によって立証されています。例えば：

- ・加害者の元への無断退所(言いづらかったから?)
- ・1997年に来所相談ができる地域相談センターを立ち上げてから「暴力がなくなってほしいが、関係を終わらせたい訳ではない。だからシェルターに行きたくない」という女性たちに出会いました。
- ・子どもの時に母親と一緒にシェルターに来ていた人たちが大きくなり、当事者として再入所→DVは世代を超えた継続的な問題
- ・第一に、「シェルターを秘密にし、当事者を遠いところに転々とさせる」というやり方は、「利用者を守るためだ」と考えていましたが、2004年に立て続けに2人の当事者が殺されました。既存のやり方では守り切れていない、新しい方法が必要だ、と痛感しました。

私たちの経験的な知恵は国際的な研究によってより深く豊かなものになりました。特にDVを目撃する子どもや、DVの様々なパターンについての研究です。そして、私たちのアプローチを発展させるのに、女性シェルターに関するオランダの最初の広範囲な研究に大いに触発され、導かれました(「女性シェルターの利用と有効性」Wolf, J., Jonker, I., Nicholas, S., Meertens, V., Pas, S.著2006年*The Use and Usefulness of Women's Shelters*(2))。この研究は私たちの、移行が必要だという実践によって得られた理解の裏付けとなり、アプローチを抜本的に転換させるきっかけとなりました。

(1)参照:「オレンジハウスのアプローチ~オランダにおける女性シェルターの新しい在り方」Reijmers, E., Geutjes, S., Evertz, K., Poortinga, N.著ブライフグループ財団アムステルダム市2011年11月

(2)上記「オレンジハウスのアプローチ」の中でこの研究に触れます。17、30-31、93ページ。

更に参照: www.impuls-onderzoekscentrum.nl/maat+en+baat.

最初の数週間のうちに帰宅する女性が多かった理由

シェルター運動の最初の数十年は、元に戻る女性が多かったです。最初の数週間の間に約40%の入所者が帰宅したと一般的に推定されます。何度も、暴力が再発する度に再入所を繰り返していました。多くの方は、パートナーの元に戻るとははっきり言わずに「いなくなった」だけでした。その背景には、いくつかの原因がありました。

- ・シェルターの住環境は女性や子どもにとって大きなストレス要因でした。15年前まで、多くのシェルターの寝室は2段ベッドの寮か相部屋で、いまだに台所やリビングが共同のところが多いです。他の利用者と生活空間を共有していただけでなく、職員も事務所が別にあった訳ではなかったので、自由に行き来して、入所者はプライバシーがほとんどありませんでした。
- ・DVの関係の複雑さはまだよく認識できていませんでした。今はDVの力学や様々なパターンがだいぶわかってきました。そして、利用者にとって時間がかかることがあると理解しています。例えば、何が起きたのか、どんな選択肢があるのか、どうすれば自信を取り戻せるのかなどを当事者が心の中で十分に理解するには時間がかかります。10年前まで、多くのシェルターでは、入所した判断に対する迷いやパートナーと連絡を取り合い続けているという話題は絶対的なタブーでした。



必要な解決策は必ずシェルター入所？

DVの被害に遭った女性と子どもの保護にはシェルターの需要が供給よりも高いのがかなり前からのオランダの現状です。ライフグループ財団はいまだに深刻な需給の逼迫に対していくつかの対策を取ってきました。私たちの活動地域における居室の数を増やしてきましたが、それは最終目的ではありません。シェルターに来ることは生活において大きなストレスを伴う変化です。一番いい選択ではない場合もあります。支援は必要としているものの、シェルター入所が必須ではない人のための様々なプログラムやサービスを開発してきました。例えば、何かの形でパートナーとの関係を継続しながら、暴力だけを止める方法を探る支援、保護命令制度(家から一時的にでも出るのは加害者側)、そして支援グループ(大人のため、DVを目撃した子どものため)があります。

オレンジハウスのアプローチでは、シェルターの住環境(居室と相談支援室を分けた)も、対応・介入の仕方も変えました。今はシステムアプローチと言って、家族全員と関わります。プログラムと選択肢を多様化させ、安全を確立するにはカップルのそれぞれの人に必要な役割と責任があることを認識しています。入所と来所(在宅)支援の連携を強化して、各利用者とその一人一人を取り巻く関係者の状況にできるだけ合った支援を提供できるようになりました。



オレンジハウス:社会への発信

新しいオレンジハウスは住宅会社と自治体との協働で設立します。資金調達は、誰もがDVとの闘いに関われるし、関わるべきだという精神を反映しています。オレンジハウスの存在は社会的な発信にもなっています。DVは無視できない社会問題です。被害当事者は隠れたり、閉じこもったり、恥を感じたりすべきではありません。DVは実存しているし、取り組むには地域社会全体の支持が必要です。そのことを公開シェルターは疑いなく表明しています。

この何年間でライフグループは3軒のオレンジハウスを建てました。アルクマール市のオレンジハウスはオランダ初でしたので、マキシマ王妃によって設立されました(2011年)。アムステルダム市は2015年で、アルメレ市は2017年でした。



オレンジハウスアプローチの効果は？

オランダでは、ヴァーウェイ・ヨンカー研究所は2016年から2020年にかけて大規模な研究を行っています。DVのパターンの世代間連鎖についてです(3)。その一部として、2軒のオレンジハウスの利用者90人に対する調査がありました。オレンジハウスに滞在するオランダ語が話せない移民女性に対する小規模な研究も共同で行いました。研究は2020年末までに仕上がる予定です。貴重な洞察が得られます。支援対象の女性たちが体験したトラウマと暴力の形態や強烈さ、そして私たちのアプローチの効果(安全、トラウマ、幸福・健康への影響)についてです。



2018年に初期の結果を得ました。オレンジハウスに滞在する女性のうち、75%は幼少期に1つ以上のトラウマ体験をしています。その女性の子どもの50%には、診断基準を満たさないものも含まれますが、トラウマ症状が見られます。

オランダ語が話せない女性に対する小規模な研究によると、言葉の壁があるにしてもオレンジハウスのアプローチは効果的です。安心と尊厳、自信と自律を取り戻します。この結果は研究者が認めています。



(3)この研究は、2014年に出版されオランダで大きな影響を及ぼした研究の続きです。

(<http://www.verwey-jonker.nl/publicaties/2014/doorbreken-geweldspatroom-vraagt-gespecialiseerde-hulp>). 2014年の研究の結論の一つは、DVに効果的に介入するにはシステムアプローチが必要なのに、ほとんど行われていない、ということでした。「好事例」として取り上げられたのは、オレンジハウスアプローチの当時の実践です(193ページ)。

問い合わせ:

ホームページ www.blijfgroep.nl

電話 088 234 24 00

メール info@blijfgroep.nl

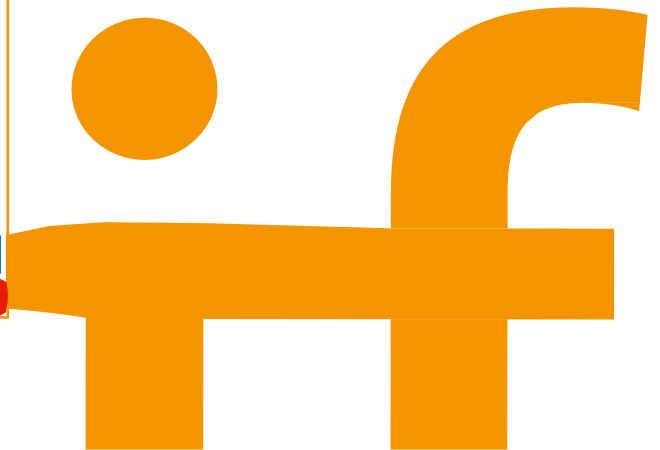
フォローしてください

フェイスブック: www.facebook.com/blijfgroep/

ツイッター: www.twitter.com/BlijfGroep

リンクトイン: www.linkedin.com/company/blijf-groep

ユーチューブ: www.youtube.com/blijfgroep



付録1: ブライフグループ財団の概要と統計

提供している支援		
支援の種類		
3つのオレンジハウス	緊急一時保護(6週間)	長期滞在施設(約半年)
アルクマール アムステルダム アルメール	12組 20組 10組	9組 54組 20組
2つの長期滞在施設		
ハールレム ザーンスタット		26組 16組
男性のための長期滞在施設		
アムステルダム		7組
来所(在宅)支援		
アルクマール、アムステルダム、アルメール、ハールレム、ザーンスタット	24時間電話相談、出張プログラム、在宅プログラム、警察がすぐに駆け付ける防犯ブザーの提供、緊急時介入、女性・男性・子どものためのグループ	
「家庭安全センター」 (フレヴォラント州)	市民や専門職が家庭における暴力や子どもに対する虐待を通報できる。アセスメントの上、必要な支援につなげる。	



利用者数	
支援を提供した人数	2018年
実人数の合計(シェルター入所と来所含む)	3,836人
来所・在宅支援を受けた実人数	3,715人
シェルターに入所した大人の実人数*	592人
入所した子ども	633人
関わっている関連者((元)パートナー、子ども、親、それ以外の家族、友人等)の人数	3,916人
* 一部には、来所・在宅支援を入所の前か後に利用する人も含まれる	

付録2: 組織の役割と責任

ブライフグループは監督委員会によって運営されている財団です。監督委員会、専務理事、労働者評議会、利用者評議会の役割と責任は定款と規約に定められています。専務理事の責務は財団の経営と方針、各評議会との対応です。監督委員会の責任は方針と、専務理事の経営と執行の権限、そして組織全体の総務を監督することです。また、定款の定め通り、専務理事の使用者としての役割、その他の責任もあります。ブライフグループの運営はオランダの福祉分野で一般的に採用されている国の指針に沿っています。財団としての定款や監督委員会規約と手順はこの指針に基づいています。